九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

芸術文化の潜在的価値を可視化する評価 ： 総合知教育への応用可能性

槇原, 彩
九州大学大学院芸術工学研究院未来教育デザインアリーナ（FeDA）

https://doi.org/10.15017/7409224

出版情報：芸術工学研究. 41, pp.68-72, 2026-03-30. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

受付日：2025 年 12 月 26 日、受理日：2026 年 3 月 2 日

芸術文化の潜在的価値を可視化する評価
総合知教育への応用可能性

Evaluation to Unlock the Latent Value of Arts and Culture
Potential Applications for Convergence Knowledge Education

槇原彩 [1]
MAKIHARA Saya

Abstract
In recent years, the increasing complexity of social issues has made it difficult to address them solely with expertise in a single field, leading to a growing emphasis on “Convergence Knowledge”—the fusion of knowledge across disciplines. However, education and co-creative practices grounded in integrated knowledge face challenges: outcomes, learning processes, and changes in relationships are difficult to capture using conventional quantitative evaluation methods. This paper reports on an attempt to redefine evaluation as a value creation process, based on evaluation practices from an arts project the author was involved in and project-based art management education at a university. Through dialogue-centered peer review, logic models that visualize value by reflecting on the past, and methods for creating shared value criteria among stakeholders, transformations in learning and latent value became apparent. These practices demonstrate an evaluative approach applicable to convergence knowledge education. It visualizes learning journeys and career development, connecting to talent development, educational improvement, and societal implementation.

連絡先：槇原彩，makihara@design.kyushu-u.ac.jp
1 九州大学大学院芸術工学研究院 未来教育デザインアリーナ（FeDA）
Future Education Design Arena (FeDA), Faculty of Design, Kyushu University

1. はじめに

近年，社会課題の複雑化・高度化に伴い，単一分野の専門知のみでは十分に対応できない状況が生じている。こうした背景のもと，分野横断的な知の融合や，多様な主体による協働を重視する「総合知」が注目されている。内閣府科学技術・イノベーション推進事務局が提示した「『総合知』の基本的考え方及び戦略的に推進する方策中間とりまとめ」[1)]では，Society 5.0 において，総合知は未来社会を構想し，社会変革を実現するための重要な概念として位置づけられている。

一方で，総合知を基盤とした教育実践や共創的プロジェクトは，従来の教育評価の枠組みでは十分に価値化されにくいという課題を抱えている。特に，プロジェクトの過程で生じる分野を架橋した学びや，思考の深化，ステークホルダーとの関係性の変化，実社会へ学びを実装する能力などといった価値は，定量的指標のみでは把握が困難である。

本稿では，筆者が関わってきたアートプロジェクトおよび大学におけるプロジェクト型アートマネジメント教育の実践をもとに，評価を通じて芸術文化の潜在的価値を可視化する試みを報告し，総合知教育への応用可能性について検討する。

2. 総合知と評価をめぐる背景と課題

内閣府科学技術・イノベーション推進事務局は「総合知」について「多様な『知』が集い，新たな価値を創出する『知の活力』を生むこと」（内閣府 2022，13）と定義している。また，多様な「知」が集うとは，「属する組織の『矩』を超え，専門領域の枠にとらわれない多様

な『知』が集うこと」であり，新たな価値を創出するとは「安全・安心の確保と Well-being の最大化に向けた未来像を描くだけでなく，社会実装に向けた具体的な手段も見出し，社会の変革をもたらすこと」であると提示した。そして，これらによって「知の活力」を生むことこそが「総合知」であり，「総合知」を推し進めることが，科学技術・イノベーションの力を高めることにつながると説明している。

加えて，総合知を構成する要素として，「『場』の構築」「人材育成」「人材の活用・キャリアパス（評価）」「問いの立て方（課題設定）」が示された（同前, 18）。特に，「人材の活用・キャリアパス」については，その評価が大きな課題として掲げられている。すなわち，総合知を獲得した人材が十分に能力を発揮することのできる「場」を作ると同時に，その活動を適切に評価するといったキャリアパスを確保していける環境の整備が求められているのである。

しかし，現状では，総合知を活用した研究や教育を適切に評価する手法，およびそれに携わった人材を所属組織において適切に評価する手法は確立されていない。そのため，総合知を担う人材が正当に評価されず，キャリア形成や実社会における活用・登用につながりにくいという問題が生じている。よって，そのまだ見ぬ価値を創造する段階にある総合知の評価は，査定・監査する役割ではなく，それを社会実装し，社会変革を促すプロセスの改善，当初は想定していなかった新しい価値の可視化など，「何を価値とするか」といった価値づけや評価基準を設定する補助線として機能していく可能性がある。

それは大学教育の現場においても同様である。近年，カリキュラム改革の一環として複眼的思考や総合知の獲得等を掲げる大学が増加している。そこでは，学生が複数の専門知を往還しながら課題に向き合う分野横断的なカリキュラム設計や，他者との対話を通じて思考を深めていくことが重視される PBL 型授業の設置などが行われている。だが，その学びの価値も，試験成績やレポート評価のみでは捉えきれない。こうした背景から，学習成果だけでなく，学びのプロセスや変容を可視化する評価の枠組みが求められている。

3. 何を「価値」とするかを評価で創造する

評価（evaluation）とは，ラテン語の接頭区である ex-（引き出すこと）と value（価値）を組み合わせた単語であり，「事実特定」と「価値判断」を組み合わせ [2]，物事の本質，値打ち，意義を体系的に明らかにすることである [3]。また，その目的は説明責任の確保に加え，プログラム（事業，政策，活動）の開発・改善，組織学習・意思決定過程の強化，知識創造，社会変革・社会正義の実現など多岐にわたる [4]。

4. 芸術文化事業の評価実践

総合知でも指摘された価値創造にまつわる諸課題については，芸術文化の領域でも活発な議論がなされている。明確な答えには辿り着いていないが，新たな価値を創造する評価の取り組みが徐々に行われるようになった。本章では，筆者が携わったアートプロジェクトおよび大学におけるプロジェクト型アートマネジメント教育の評価実践について，3 点ほど事例を紹介する。

4.1. アートマネジメント人材育成講座における対話を軸にしたピアレビューの導入

アートプロジェクトにおける評価が重要視され，さまざまな評価手法が導入される一方，そのあり方自体にモヤモヤを抱える現場も多い。

東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科・文化庁 大学における文化芸術推進事業「グローバル時代のアートプロジェクトを担うマネジメント人材育成事業 & Geidai」では，2017 年度から 2018 年度にかけて「アートプロジェクトのピアレビュー [5]」[*1] を実施した。そして，現場に寄り添った評価のあり方を模索しつつ，アートの領域ではまだ方法論化されていない，対話を軸にしたピアレビューを紹介し，その評価の可能性を検証・共有した。

主体として参加したのは「取手アートプロジェクト」[*2]「谷中のおかって」[*3]「アートアクセスあだち音まち千住の縁」[*4] といった 3 つのアートプロジェクトのスタッフたちで，まずは SWOT 分析などを用いてそれぞれの価値や課題を可視化することから始めた。次に，各プロジェクトがそれぞれ共通点のある団体を探して声をかけ，「取手アートプロジェクト」は「應典院」[*5]，「谷中のおかって」は「芸術家と子どもたち」[*6]，「アートアクセスあだち音まち千住の縁」は「TERATOTERA」[*7] をピア・パートナーとして迎えた。そして，お互いのプロジェクトを視察し，情報や意見を交換しながら評価を行った。

その結果，「取手アートプロジェクト」と「應典院」は，志を共有する他者として出会い，対話を重ねることで相互にエンパワメントされた [6]。「谷中のおかって」と「芸術家と子どもたち」は，本取り組みを通して交流を

深めたスタッフ同士が協働し，新たな事業へ参画している。「アートアクセスあだち音まち千住の縁」と「TERATOTERA」では，サポーターの役割が単なる運営補助にとどまらず，参加者同士をつなぐプラットフォームや事業の原動力となっていることが明らかになった（同前，96）。



図 1　2017 年度【理論と実践編】：冬季交流ラボ「ピアレビュー勉強会」の様子 [*8]

4.2.「メモリーバックアップ」としてのロジックモデル

2 つ目の事例は，長期的に展開されてきたアートプロジェクトにおける評価である。筆者は，東京都足立区千住で 11 年間（当時）継続しているアートプロジェクト「Memorial Rebirth 千住」[*9] について，プロジェクトの価値を評価してほしいと依頼を受けた。そこで関係者に「プロジェクトの価値はどのようなものだと思うか」と問いかけたところ，長年の活動には確かな価値があると感じながらも，それを言語化できないもどかしさを抱えていることが分かった。また，作品制作やイベント実施といった成果だけでなく，地域との関係性や参加者の変化をどのように捉えるかが課題となっていた。

そこで筆者は，関係者との対話から評価を設計し実践する「参加型評価」「対話型評価」を提案した。具体的には，現在を起点として過去を振り返るバックキャスティング型のロジックモデルを構築し，関係者が自身の実践に意味や手応えを見出す機会を創出することをめざした。

ロジックモデルは形成的評価の手法のひとつであり，基本的には，プロジェクト開始前またはプロジェクトの初期段階に，「もし〜なら，こうなるだろう」といったプロジェクト目標を達成するための仮の道のりを示すものとして作成される。そして，プロジェクトの過程でその道のりを都度振り返りながら，事業をよりよい方向に改善，軌道修正していく結果までの道筋を示すフレームワークである。想定していた結果と実際を比べてズレの原因を考えたり，アウトカムや社会的インパクトを実測することで，初めて評価として機能する。

しかし，あらかじめ道のりを設定し，目的地を定める一般的なロジックモデルは，個人の感覚・感性と深く結びついたアートなどの領域や，人間を対象とする障害福祉や看護など対人サービス系の領域といった，不確実性の高いものとはなじみにくいとされてきた。こうした課題を背景に，近年の評価学では，プロセスの中で生まれる価値を捉える「価値創造系ロジックモデル」の開発が進められている。

本事例では，ロジックモデルを「過去との比較を通じて自己の変化を言語化・可視化するツール」として活用した [7]。具体的な評価プロセスは以下の通りである。

1. 10 年間のエピソードを，さまざまなステークホルダーから聞きとる。（振り返り）
2. ロジックモデルの型に落とし込む。（構造化）
3. プロジェクト開始から 10 年経った現在起こっている出来事を，「成果」としてみなし，「中間アウトカム」や「最終アウトカム」として落とし込む。
4. 「Memorial Rebirth 千住」10 年間の成果をシンプル化し，俯瞰する。（客観視）
5. 「新しい価値」を顕在化させる。（価値の共有）

ロジックモデル作成の過程では，過去のエピソードを振り返りながら，現在起きている出来事を「成果」として捉え直し，中間アウトカムや最終アウトカムとして整理した。すると，プロジェクトの価値が単なる芸術的成果にとどまらず，「さまざまな場で創造的な人材として活躍できるノウハウの獲得」にも及んでいることが明らかになった。また，アーティストや学生，地域住民など，本事例に関わる人々の間で創造意欲の刺激や，市民参画の過程における市民自身の意識変容など，それぞれの価値変容に関わる出来事が起こったこと，さらにその現れ方は多様であり，各人がどのように咀嚼し，自分たちの中に蓄積していくかは異なることも確認された。

本事例において，ロジックモデルは評価ツールであると同時に，関係者の記憶を補完し，価値を共有するための装置として機能した。

4.3. ステークホルダー共通の価値基準を創造する

筆者が 2025 年 9 月まで学生指導を担当していた成蹊大学文学部芸術文化行政コースは，学科横断型のコース

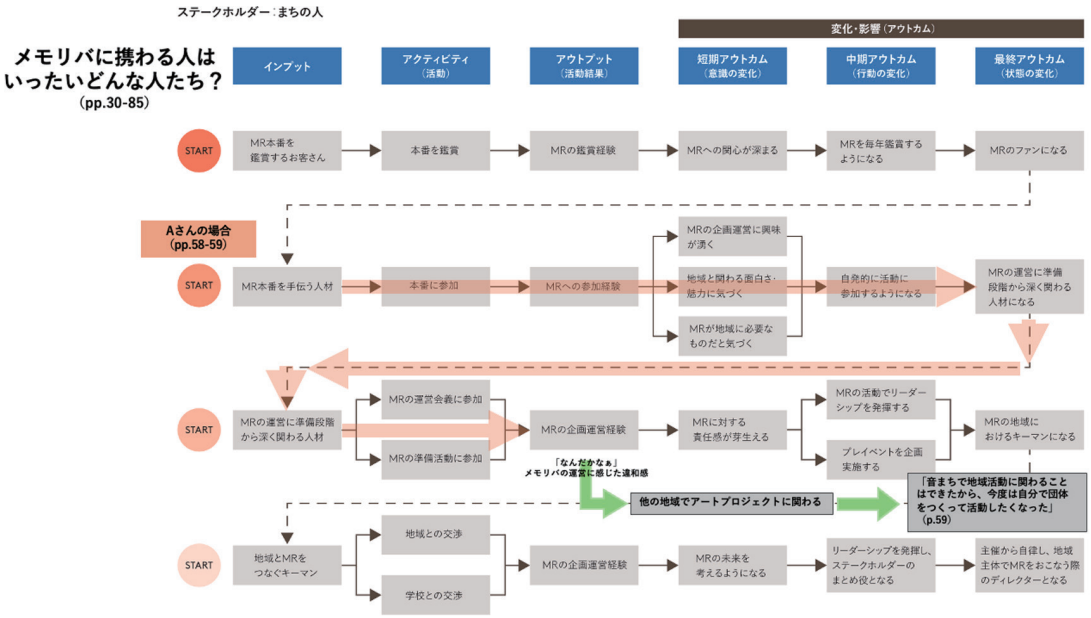


図 2　ステークホルダー（まちの人）の意識変容 *10

である。本コースでは，地域連携型 PBL 授業を基幹科目とし，官民学連携によるアートプロジェクトを実施してきた。 筆者は学生指導だけでなく，そのアートマネジメント教育プログラムの設計・運営，教育評価の実践，成果発表会のディレクション（企画立案・制作統括・連絡調整など）まで，総括的に関与した。

授業設計にはインストラクショナルデザインを用い，ニーズ分析から実装，評価までを一連のプロセスとして構築した。学生がアートプロジェクトを通じて地域課題に向き合い，複眼的思考を育むことを目的とし，企画立案から実装，成果発信までを学生主体で行った。教員は伴走者として関与し，アートを通じて新たな価値観を社会へ問いかける経験を提供した。また自身の専門知に，アートの持つ創造性を加えることで表れる新しい可能性や価値を妄想するわくわく感を学生へ提供することを心がけた。

評価においては，課題レポートの記述や発表に加え，成果発表会後の振り返りで語られた学生の感想を質的に分析し，学びの変容を可視化した。計量テキスト分析ソフトや KJ 法を用いることで，学生がどのような気づきを得たのか，どのように思考が変化したのかを整理した。

さらに，これらの成果は出版という形で社会に共有され，教育実践そのものが社会実装へと接続された [8]。この過程により，本授業の教育的価値のひとつが「不確実な社会をしなやかに生きる力」を育む点にあることが明らかになった。

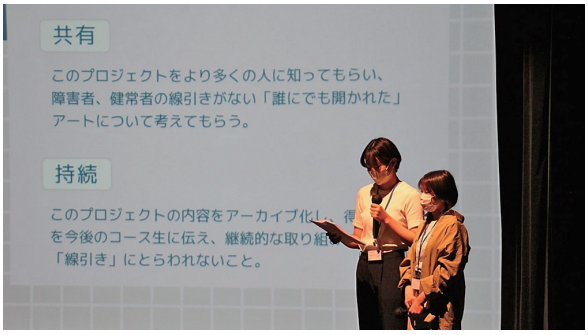


図 3　成蹊アートプロジェクト 2022 成果発表会の一幕 *11

また，コース運営教員やアーティスト，協働パートナー，地域住民といったステークホルダーと対話を重ね，その目的の違いをパーパスモデル [9] で可視化した*12。その結果，学生が社会で活躍することを通じて「武蔵野市における共生社会の実現」をめざすという共通の価値基準が存在することが確認された。

5. 総合知教育への応用と考察

以上のアートプロジェクトおよび大学におけるプロジェクト型アートマネジメント教育の実践やその評価手法は，総合知の価値を共に創造する評価の仕組みとしても応用可能であると考えられる。

総合知教育における評価を，学習成果を固定的に示すものではなく，学びとキャリアの「道のり」を可視化し，更新し続けるプロセスと捉えるならば，ロジックモデルを用いた振り返りは，学習者が自身の学びを言語化し，

内発的関心を高め，主体的に進路を設計する契機となりうる。また, PBL 授業などで多様なステークホルダーと関わった学習者同士が，ピアレビューを通じて互いの学びを評価することは，その授業自体の新たな価値創造にもつながる可能性がある。

こうした評価データは，教育改善やカリキュラム設計に資するだけでなく，マイクロクレデンシャル等を通じた総合知人材育成の基盤としての活用も期待できる。そして，総合知の潜在的価値を可視化し，その有用性を示すことは，新たなキャリアの創造にも寄与するだろう。

6. おわりに

本稿では，評価を通じて芸術文化の潜在的価値を可視化するアートプロジェクトおよび大学におけるプロジェクト型アートマネジメント教育といった実践を報告し，総合知教育への応用可能性を検討した。評価を「測定」から「共創」へと転換することは，芸術工学分野における教育・研究・社会実装を接続する上で重要な視座を提供する。今後も評価実践を継続的に蓄積し，総合知教育への展開をさらに進めていきたい。

注

*1 ここでいうピアレビューとは「同類の他者による検証」であり，「当事者がよりよい成果物を生み出せるように，専門性や能力，技術などが同等・類似の他者が，現状の成果物やパフォーマンスの状況を調べて課題や欠陥などを見つけ，改善と質向上の機会を提供する検証」を意味する（若林 2020, 10-11）。

*2 茨城県取手市で 1999 年より市民と取手市，東京藝術大学の三者が共同で行なっているアートプロジェクト。取手アートプロジェクト実行委員会と NPO 法人取手アートプロジェクトオフィスが実施主体を担う。芸術による文化都市をめざす取手のまちをフィールドとして，アーティストの活動支援と，市民の芸術体験・創造活動の仕組みづくりにより，芸術表現を通じた新しい価値観の創造をめざして活動している。（ピアレビュー実施時の情報）

*3 東京都台東区谷中地域を拠点に，アートイベントの企画・運営・サポートを実施するアートプロジェクト。2008 年，東京藝術大学の教員と学生を中心に活動を開始した。現在は一般社団法人谷中のおかってが実施主体となっている。文化芸術の企画を通じて世代や異なる価値観を超え，さまざまな人と文化を共創する場づくりをめざしている。（ピアレビュー実施時の情報）

*4 東京都足立区にアートを通じた新たなコミュニケーション（縁）を生み出すことをめざす市民参加型のアートプロジェクト。運営主体は東京都，アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団），東京藝術大学音楽学部・大学院国際芸術創造研究科，NPO 法人音まち計画，足立区。千住地域を中心に，市民とアーティストが協働して，「音」をテーマとした多様なプログラムをまちなかで展開している。（ピアレビュー実施時の情報）

*5 1997 年に再建された浄土宗の寺院。かつてお寺が担っていた地域文化の振興に特化した場として，〈気づき・学び・遊び〉をコンセプトとした「葬式をしない寺」。NPO 法人「應典院寺町倶楽部」を設立し，会員である市民やアーティストと協働しながら多彩な文化事業を展開している。（ピアレビュー実施時の情報）

*6 現代アーティストと子どもたちが出会う「場づくり」を行う NPO 法人。学校や児童養護施設などを中心に教育や福祉分野を横断して，アーティストによるワークショップを実施している。子どもたちにとっては潜在的な力を存分に発揮し伸ばす機会，アーティストにとっては子どもたちと関わり，新たな表現を探る機会となるよう取り組んでいる。（ピアレビュー実施時の情報）

*7 JR 中央線高円寺駅〜国分寺駅区間を中心とする杉並，武蔵野，多摩地域に点在するアートスポットをつなぎながら，現在進行形のアートを発信するプログラムを展開するアートプロジェクト。東京都，アーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団），一般社団法人 Ongoing が運営主体となっている。プログラムの企画・運営の実践を通じ「TERACCO（テラッコ）」というボランティアの人材育成にも注力している。（ピアレビュー実施時の情報）

*8 写真提供＝東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科・文化庁 大学における文化芸術推進事業「グローバル時代のアートプロジェクトを担うマネジメント人材育成事業 & Geidai」

*9 1分間に最大 1 万個のシャボン玉を生み出す装置を数十個並べて，無数のシャボン玉で見慣れたまちを一瞬にして光の風景へと変貌させる現代美術家・大巻伸嗣のアートパフォーマンス。千住では，2012 年 3 月にいろは通りから始まり，区内の小学校や公園など毎年場所を変えながらリレーのバトンのように手渡されている。

*10 槇原（2022）の付録をもとに筆者追記。

*11 写真出典＝成蹊大学公式ウェブサイト「芸術文化行政コース」，https://www.seikei.ac.jp/university/bungaku/about/aca.html，最終閲覧：2025 年 12 月 24 日。

*12 パーパスモデルとは，「より良い社会を実現するための行動原理」であり，多様なステークホルダーが共に活動するための「パーパスを中心とした共創プロジェクトの設計図」（吉備他 2022，14）。

参考文献

1) 内閣府 科学技術・イノベーション推進事務局「『総合知』の基本的考え方及び戦略的に推進する方策 中間とりまとめ」2022 年 3 月 17 日。
2) 源由理子『参加型評価：改善と変革のための評価の実践』晃洋書房，2016 年, pp.4-5。
3) Scriven, M. (1991). *Evaluation thesaurus* (4th ed.). Sage Publications, Inc.
4) 一般財団法人 CSO ネットワーク「発展的評価 Developmental Evaluation 理解のためのはじめの一歩（Version 1: 11/11/2017）」2017 年。
5) 若林朋子「ピアレビューのすすめ」，熊倉純子・槇原彩編著『アートプロジェクトのピアレビュー 対話と支え合いの評価手法』水曜社，2020 年。
6) 熊倉純子・槇原彩編著『アートプロジェクトのピアレビュー 対話と支え合いの評価手法』水曜社，2020 年，p.47。
7) 槇原彩「『メモリーバックアップ』としてのロジックモデル：Memorial Rebirth 千住の 10 年間を事例として」，『アートプロジェクトがつむぐ縁のはなし：絵物語・声・評価でひもとく 大巻伸嗣「Memorial Rebirth 千住」の 11 年』 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京，2022 年。
8) 川村陶子他『アートによる共生社会をめざして』風間書房，2025 年。
9) 吉備友理恵・近藤哲朗『パーパスモデル：人を巻き込む共創のつくりかた』学芸出版社，2022 年。